



《講演要旨》 ※事前に糟谷理恵子氏よりいただいた原稿を編集し掲載します。

## 【桃源郷づくりで地域活性化】

### ① 会の誕生



高蔵寺ニュータウン高森台地区に、造成したまま放置された約8万平米の県有地がありました。

平成24(2012)年、この県有地の一部に福祉法人の施設を誘致するという住民説明会が開かれました。説明会に集まった人には地域活性化に取り組んでいる人が多く、「この広

大な土地の活用を周辺住民からも発案していきたい」と閉会の直後から会の結成に動きだしました。ここで出来たのが「高森台県有地の活用を提案する市民の会」、ハナモモの会の前身です。

最初のころはアンケートを配布して地域住民の希望する事について調べたり、それをビジュアル化した模型を作って県庁や市役所に陳情に行ったり、行政と市民との協働についての勉強会を行うなどしていました。

### ② コミュニティガーデン

この勉強会の中で、まちづくり活動の一手法「コミュニティガーデン」の存在を学びました。住民が共同の「憩いの庭」を作り、花壇やベンチなどを造作したり草花の世話をしたりすることで、ゆるやかなコミュニティを創っていく「コミュニティガーデン」。会の目指す地域活性のツールに最も相応しいという考えに至りました。この活動の場所として、最初に県有地に建てられた高齢者福祉施設「どんぐりの森」の本木施設長が敷地の利用を許可して下さったため、現在に至るまで会の活動拠点のように使わせていただいています。

「花を咲かせよう、みんなで楽しもう」と名付けた「花咲か作戦」。まず行ったのは、堆肥づくりです。近くの県有林から伐採されたヒノキの丸太を井桁に組んで堆肥柵を造り、枯れ葉と米ぬかなどを入れると半年余りでとても良質な堆肥が出来ましたが、攪拌の重労働には閉口しました。

また施設入口の斜面には木の板や丸太の残りをを使って花壇を造りました。この時こ

### コミュニティガーデン

皆が協力し、楽しみながら庭や花壇を造り  
草花や木々を育てていくことで  
人と人とのつながりを広げていく  
コミュニティづくりの方法

高森台県有地は歩く人もまばらだけれど  
眼前には緑深き築水の森が広がり  
鳥のさえずりも聴こえる静かな地域

ここに花木や草花を育てて美しい景観を創り出し  
地域の誇りともなりうる名所にしたい

高齢者福祉施設「どんぐりの森」が  
敷地斜面を使わせて下さることになった



### 「花咲か作戦」始動！

の場所の土壌が非常に硬く痩せていることを実感しました。花壇には毎年ヒマワリやコスモス、パンジーなどを植えています。花壇の世話は体力がそれほど必要ないので、女性に人気です。ヒマワリの種を協力者の手に託し、苗が育ったら里帰りさせて花壇に植える「ヒマワリ里親大作戦」は「ハナモモ育樹祭」より前から行っている企画です。

### ③ 桃源郷プロジェクトの始まり

敷地の道路沿い斜面に人々に愛される木を植樹しようという発想はあったものの、何がいいか迷っていた時、テレビや雑誌で取り上げられ始めていた長野県阿智村の「花桃の里」へ仲間5人で見物に行きました。赤・白・ピンクそれに一輪の花に紅白の色が乗る満開のハナモモが一带の山を覆いつくし、まさに桃源郷！一同はその圧倒的な美しさに感動し、県有地の斜面に植えるのはハナモモだと全員の気持ちが瞬時に一致しました。

後日阿智村を再訪し、たった一人でハナモモを植え始めたという自称「花咲か爺」渋谷秀逸さんに、ハナモモを植えた動機やその後の経緯を伺いました。

阿智村のハナモモのルーツは「日本の電力王」福澤桃介がドイツから持ち帰った3本の苗。それが清内路村に伝わり、門外不出となっていたのを渋谷さんが拝み倒して苗を譲り受け、地道に増やしていったというのです。一人で1000本植えたところで地域の人が協力してくれるようになり、「花桃の里」づくりの委員会も立ち上がりました。元は恵那山トンネルの残土が積まれ、訪れる人も少なかった限界集落が、今やGWの「花桃まつり」に全国から2万人の人を呼ぶ、下伊那地方の一大名所となったのです。殺風景な造成地に花を植える事で人のつながりができ、地域のまちおこしとなった、壮大な「コミュニティガーデン」です。ドイツから次々と人の手に渡ったハナモモのバトンを、次は我らが受け取ろう。そして多くの人が花を愛でに訪れるニュータウンの名所にしようという大きな夢を持ちました。「桃源郷プロジェクト」発進です。

### 桃源郷プロジェクト

昭和60(1985)年長野県阿智村智里地区 阿智村の「花咲か爺」渋谷秀逸さん(故人)



「恵那山トンネル土砂場」



月川温泉「野熊の里・月川」の初代社長

### ④ ハナモモ育樹祭

ハナモモは根の成長が止まる2～3月が苗の植え時。ただ仲間ではなく、多くの人を募って植樹してもらい、その後の成長も見守って欲しいという想いを込めて名付けた「ハナモモ育樹祭」を毎年開催しています。出店やミニ動物園など大人も子どもも楽しめるお祭りで、当会を代表するイベントです。

市民協働の勉強会は第1回育樹祭を開催する頃に終了し、会の活動はハナモモを中心とする植栽管理活動一本となりました。2019年、会の名称を現在の「高蔵寺ニュー



タウン・ハナモモ桃源郷の会」愛称「ハナモモの会」に変更しました。

### ⑤ みどり香るまちづくりコンテスト入賞

ハナモモの花期以外は面白味に欠ける斜面。何かいい案はないかと考えていた時に環境省主催のコンテストの存在を知り、2019年秋に応募しま

した。ハナモモだけでなく、ハーブやジャスミンのような触れば香りが立つ植物、ゆずやブルーベリーなど果実を収穫できる植物を植え、障がいのある人でも五感で楽しめる散歩道を創るというコンセプトは大きく評価していただき「日本アロマ環境協会賞」を受賞しました。副賞の16種195本の苗木はハナモモと香りの花木・ハーブに分け、2020年の育樹祭は日を空けて盛大に2回行う予定だったのに、コロナ禍のため少人数で苗を植えるだけで終わってしまったのは実に残念でした。

### ⑥ 活動資金と仲間の集め方

活動資金は会の年会費とは別に、ハナモモの植樹を決めた2016年秋から「花咲か基金」を立ち上げました。当初一口2000円、2020年4月からは一口1000円で、活動に賛同して下さった方が全国から協力して下さっています。また企業にも掛け合い、特別協賛金

として一口3万円を頂いています。育樹祭の時は特別協賛企業の看板を立て、記念の植樹を行って頂いています。

仲間集めには「花咲かサポーター」という制度を作りました。会員である必要はなく、10日に1回（夏季は5日に1回）の作業に気軽に参加してもらおうというもの。参加10回で記念品を贈呈しています。サポーターに登録して一度も参加していない

### 環境省「みどり香るまちづくりコンテスト」入賞



という人も多いですが、毎回の活動前に告知のメールを皆に出すことで、会の活動に興味だけは持ち続けていただきたいと考えています。またブログや Facebook で活動報告を発信し、少しでもたくさんの方に存在を知っていただきたいと願っています。

## ⑦ 今後の課題

課題その1：高齢化。会員もサポーターも高齢者が大半を占め、草刈り機の使用など滑りやすい斜面での活動が年々難しくなっています。今後はお金がかかってもプロの力を借りながら、無理なく息の長い活動をしていければと思います。

課題その2：土壌改良。もともと養分も水分も乏しい硬い粘土質の土地で、樹木屋さんには「桃を植える土ではない」と言われました。木質チップや馬ふんを表土にまいて様子を見ていますが、ほかには土壌改良を期待できる根粒菌を多く持つクローバーの種まきや土ほぐしなど、試行錯誤を繰り返すしかないのが現状です。

課題その3：毎年「ヒマワリ里親大作戦」と称して植えているヒマワリについて。多くの人のつながりを作ってきた作戦ですが、夏季の世話が大変なので検討課題の一つです。何とか策を練って存続させたいと思案しているところで

す。

課題その4：来年度以降のハナモモの植樹。高森台県有地には今後新しく施設が建つまでは、植樹はできません。隣接している高森山公園に植樹するという意見も出ていますが、まずは今まで植えてきた木を育てることを一番に考えようと話し合っています。

## ⑧ 第5回ハナモモ育樹祭

コロナ禍で2020年の第4回は大幅縮小、2021年は完全中止となりましたが、2022年は今のところ第5回を行う予定で準備を進めています。

### 第5回ハナモモ育樹祭

2022年3月12日(土) 10:30~13:00 (雨天翌日)



育樹祭準備の一環として、竹を使った植樹苗の支柱作りがあります。疲れますが楽しい作業です。今年も竹やぶに出向いて150本ほど作ってきました。

ハナモモ植樹のほか、同時開催としてママ達のグループ「さくらいろプロジェクト」によるマルシェが5店、それにキッズチアダンスが会場を盛り上げてくれます。入場無料で

すので、是非お越しく下さい。植樹をご希望の方は予約して下さるのが無難です。チラシをご覧ください。

### ⑨ 喪失感を乗り越えて

最近ハナモモの会にとって無くてはならない存在を二人失いました。一人目は当会の目標である阿智村「花桃の里」の礎を築いた渋谷秀逸さん。そして当会の精神的黒柱だった林明代さん。特に林さんを失ったショックはいまだ癒えていません。それでも会員一同、前をむいてまずは育樹祭を成功させなくてはと意気込んでいます。

### 喪失感を乗り越えて



【阿智村の花桃が郷】  
渋谷秀逸さん  
2019年4月6日逝去  
(享年82歳)



【高蔵寺ニュータウンの  
ジャンヌダルク】  
林明代さん  
2021年10月1日逝去  
(享年76歳)

(編集責任：河地 清)

## OPINION

### 地域活性化の原動力は、自分の足下の魅力・特色に気付くこと！

今回の実践例を聴いて地域活性化のエネルギーの源泉は、人の情熱であることが再び再確認されました。では、その情熱はどこから湧き出てくるのかを考えたとき、暮らしている土地に対する愛着とそこに暮らす人たちへの愛と情熱であることもよく理解できました。限界集落であった阿智村を花桃で蘇らせた渋谷秀逸さん、高蔵寺ニュータウンの「ジャンヌダルク」と言われた林明代さんはその地域にとっての活性化のシンボルといえます。いきいきした地域をつくるために何が必要なのだろうかということ、教えてくれているのは、限界集落をハナ桃で埋め尽くして、一大名所に育て上げた渋谷さんという地域を愛する老人の情熱であることがわかりました。地域のもつ人と自然の力、そして、温泉という地域の資源の力に気づきそれを見事に引き出した発想は地域創生の見本であることを示しています。住んでいるところを住んでいる人たちが胸を張って第三者に説明できることが「地域活性化」の基本的な条件だと思えます。それには、自分の住んでいる所を知ることから始めなければなりません。自分の生まれ、育まれてきた自然や、風土を知れば知るほど愛着と、誇りが醸成されてきます。人間にも必ず一つ、二つ、必ず良いところが在ると同じように、その地域にも他にはない魅力や、特色があるものです。その魅力、特色は、その地域の大切な資源であり、共有の財産です。その資源に気づきそれを最大限に活かした活動の取り組みこそが「地域活性化」の取り組みだと思えます。「もうこの地域は限界だ・だめだ」と嘆く前に、地域のもつ人、自然、文化、産業の力に気づきそれを引き出してゆく創造力こそ必要な時だと思えます。

(文責：河地 清)

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学

検索